

# 東方紛争録

ハズミング

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幻想郷には、大きな戦争があった。  
月との戦争。

この話は、その後の、歴史から消されたもう一つの戦争。

そこに生きた、人の物語。

# 目次

シロウ①

---

1



## シロウ①

ドオーンドオーン。

人が死ぬ音が聞こえる。

当たり前だ。ここは、戦場。

人を殺しても罪にはならない。そんな場所にいる。

俺は、シロウ。15だ。

ふと、空を見上げる。雲の色は黒い。しかし、夕方なので、黒と赤のグラデーションができています。

「何見てるの？」

肩を後ろから叩かれる。

「別に」

「ふうん」

彼女は、面白くなさそうに答える。

彼女ーミコは、俺とミコが、解放軍に拾われるまで

は、彼女の家で暮らしていた。そんなときから、彼女とは過ごしていたので、周りか

らは彼女だと思われるらしいが、お互いが、拾われてからもしばらくは、二人で行動していたため、長く共に過ごさすぎたためか、そこまで恋愛感情がない。

お互いのことは、異性と、あまり思ったことがない。

……………で、今俺たちは、初めての任務のために、敵の駐屯地近くに隠れて、敵の戦力の調査に来ている。今のところは、順調だ。敵にばれてないし、ばれても、弱そうなやつから、とつた、服と身分証明書を持っているから、ばれてもごまかせる。ごまかせなかつたら、「能力」で、どうにかしよう。

……………うん。

「ふーん。兵士、人数、1000、推定。っと。」

横で、ミコは双眼鏡で駐屯地の出入りを観察している。

それを横目に、仕事に戻る。

「ねえ、何してるの?」

背後から聞こえた、声に一瞬戸惑う。

聞いたことのない声、俺たちはバレたのかもしれない、しかし、聞こえた声は一人。もしかしたら誤魔化せるかもしれない。

冷静を装いつつ、後ろを振り向く。

びつくりした、声が男性であることはわかっていった。しかし、俺たちの後ろに居たの

は、身長180cmくらいの大男だった。目は優しく、武器らしい武器も持っていない。「君たち、どこ担当何ですか？」

その大男は、優しく、丁寧に訊ねてきた。

「えーっと、地理調査係ですよ。ほら、地形をしてみたほうが有利でしょ、」

「ふーん、俺さー、最近配属されたんだよねー、ありがとー」

そう言つて、大男は立ち去つた。

ハア、ハア、ハア。

もうバレたのか、ヤバい、すぐにでも立ち去らなくては。

「なあ、ミコ、早く早く、場所を移ろう。早く。」

俺はミコに急かすが、ミコは動かない。

「待つてよー、あ、クソ、見逃しちやつたじゃないのよ。」

そういつて、双眼鏡を構えて何かを見ている。

「おい、何みてんだよ、貸せよ。」

強引に、双眼鏡をミコから取り、双眼鏡を構える。

どうも、男女がキスをしている。ミコはこういうのが大好きなのだ。まあ好きなものはしようがないが今見るのか。こう、所々が抜けているのだ。

二人は知らない、危機は迫っていることを

#### 4 シロウ①

o